ふと、立ち止まれば

三浦　恵子

あぁ　空は優しい

私たち人間の頭上には
こんなに綺麗なものがあるというのに
誰もが皆　大事なものを
気づかない間に見失っていた

あの子の　優しい瞳に宿るのは
傷つきながらも
人を許し　心に寄り添う
母の愛のような
深く　温かなまなざし

誰も傷つけず　争わず
大切なものを守りたい
誰かの心に
深く根を張る悲しみを
一瞬で癒したい
でも　そんなこと
社会の中では
おとぎ話のように　語られるだけ

たとえ　夢のようなことでも
私たちには
人の心を動かす思いと

何かを創り出せる手
そして
暗闇に光を灯す人々の笑顔が
世界を変えられると　信じ続ける

笑うこと　泣くこと
嬉しいこと　苦しいこと

様々な感情に
心は震え
人は命を知り
日々は　紡がれてきた

何度も壁にぶつかり
それでも
諦めずに歩いてきたからこそ
得たものが　ここにある

太陽が昇るたび
空から届く　温かさ

人間は感情に
揺さぶられてしまう生き物だけど
こんなにも純粋に
空を　見上げたとき
人の心は
優しくなれる

人を憎むことで終えるのではなく
誰かの痛みに

寄り添う心で向かい合えば
生まれくる　本当の温もり
それはきっと
無償の愛のように
人を　心から想う気持ちが
無限の空から　降り注ぐ

そんな深い優しさを
大切なあの人へ　届けたい
人を強くさせる思いを
これからも　ずっと

そして　それぞれの場所から
人々は足を止め
この空を　見上げる
社会の片隅から
真っすぐな想いを胸に――

祈りは風と共に

風が
地球のすべてを流れ
空は　果てしなく広がる
だけどあなたは雑踏にのまれ
心に襲ってくる孤独と闘っていた
焼けるような言葉が
何度も胸を砕くたびに
溢れる　涙

それでもあなたは
ここで
生きることを選んだ

逃げてばかりじゃ
嫌なんだ

そんな言葉を　心の中で
あなたは
きっと何度も繰り返し
そして
飲み込むように
ぐっと　顔をあげた

信じることも
願うことも
叶う保証なんて
どこにもない

毎日　それを思い知るのが
怖くて　苦しくて

人は　なぜ感情を持って
生れてきたのだろう
目の前にある　すべてのことが
夢であってくれるなら、と

自分を責め
あなたの心は
闇に抱かれるように　生きる

どうか
この世界に
あなたは必要だと言って
ここにいてもいい証を
私に与えてください

泣きながら
震え
それでも信じ
叫んだもの

けれど　自分自身と闘う
あなたの傷ついた心は
いつの日か
あなたのすべてを許し
守ることの愛に気づき始める

涙が落ちた
その場所から
花が優しく芽吹くように
あなたの人生が
人の悲しみを包む愛に触れる

世界が　どんなに争い
人を傷つけようと
誰にも奪えない大切なものが
いつも
どんなときも
あなたの中に　必ずある

流したその涙が
やがて
誰かの道しるべとなるとき
歯を　くいしばって歩いた
あの遥かなる道は
いつの日か
あなたの過去さえ癒してゆくでしょう

あなたの祈りは
あなたを
大切に思う人たちのそばで
風になり　今

寄り添いながら

この空の下で
誰かの
笑顔に寄り添うように
小さな花は　咲いていました
風が吹き
微笑むように揺れて
花は　空に向かい
凛とした姿で咲くのです
花の　姿のように
どんな苦しみにも負けずに
強く生きるのは
絶対　自分には無理だよと
心が砕け散りそうな　誰かのそばで
花は　優しく揺れました

でも　忘れないで欲しいのです

どんなに
強い風に吹かれても
根を張り
精一杯生きる花たちは
本当は　強さだけを
秘めているわけではないことを

えぇ　確かに花は
一生懸命　咲きました

だけど
人の心と同じで
弱くて脆い
一本の茎で立つ
その命は

僅かな力で　折れてしまう程
はかないもの

それでも咲きました

今を　生きようと
必死にもがく
本当は　優しくて強い
あなたのように

花も　人も
弱さと強さを抱いて
生きている

何よりも
温かい愛を抱いて
生きている

花も　人も
脆く尊いからこそ
その命は
物語になる

そして
人の痛みに
寄り添い
私たちは　きっと
強く　咲くことができる

それは
自分のために
そして
誰かのために
やがて過ぎゆく
時代のために

咲き誇れ　未来へ――